

CLOSE-UP Interview

木村清志 大学院生物資源学研究科教授

魚たちを分類し
この地球に生きた証を
記録するために。

三重大学大学院生物資源学研究科附属紀伊・黒潮生命圏フィールドサイエンスセンター附帯施設水産実験所。実験棟や宿泊棟を有し、臨海実習や卒業研究などを行う学生の教育施設として、また研究者の研究・実験施設として広く利用されている。大学院生物資源学研究科の木村清志教授は、水産実験所所長として教育に携わりながら、魚類の分類学の研究を展開。その研究姿勢は、この地球にともに生きる魚たちへの愛情にあふれている。



標本づくりや解剖を行う実験室。研究中の魚の標本が並ぶ。



教授が発見したアジの未記載種。近々、論文をまとめて世界に発表する予定。

魚取りに夢中だった幼年時代

三重県志摩市。真珠養殖で有名な英虞湾に浮かぶ座賀島に、三重大学大学院水産実験所はある。ここで学生たちの臨海実習などの指導にあたり、30年以上にわたって魚類の研究を続けているのが所長の木村清志教授だ。魚好きの原点は小学生時代にさかのぼる。京都の嵐山や岐阜の大垣など、父母に連れて行ってもらった地で魚取りに夢中になった。中学時代、電子工学にも傾倒するが、高校では生物部に入部。この川にはどんな魚が棲んでいるのかといった生物調査に部活で取り組み、こうした活動を続けたいと当時の三重大学水産学部へ入学した。やがて「水の中で魚がその一生をどう過ごすのか、すべてを知りたい」という想いが強くなり、魚の生態研究から研究者の道を歩み出す。

混乱を整理して分類する

「今でも魚の生き様に一番興味があるんです」と微笑む教授だが、現在の研究テーマは、東南アジアやインド洋などあたたかい海

域の魚類の分類だ。分類学は200年程前に始まった学問だが、世界各地で毎年新種が出たり、今まで別種だと思われていたものが同種だったり、いまだに混乱しているという。「分類学とは、ゴチャゴチャに散らかっているものを、進化の系統できちんと分けて棚に入れていく仕事なんです。もちろん僕一代で終わる仕事ではないですが、少しでも混乱をなくしたいと考えています」。こうした研究の背景には、もう一つの想いがある。「アフリカのビクトリア湖には、まだ名前さえつけられていない魚たちがいます。でも、養殖のために大きな魚を放したため、もともといた魚たちが絶滅しつつある。名前もついている魚が日の目も見ずに絶滅するなんて、かわいそうに思うんですよ」。どんな小さな生き物も、生き物として敬意をもって名前を呼びたい。教授の深い愛情がそこにはある。

海外の調査で見えてきたもの

教授が分類学に取り組む転機となったのは、国際プロジェクトの一員として参加したインドネシアでの生態調査だ。「生態を調べ

るには、この生き物が、この時期どこにいるという情報がないと調べられない。ところが、現地の人に聞いても魚の名前はわからないし、区別もついていない。そもそも研究者が使う図鑑がないんです」。生き物の分類が進んだ先進国であれば、次の段階として生態的な研究が進められる。しかし、そうではない東南アジアやインド洋の国々では生態学の研究は不可能なのだ。「そのことに、あまりに我々が子どもの頃から図鑑を見慣れているので気づけなかった」と振り返る教授。必要なのは、まず図鑑を作り、現地の分類学者を育てること。基礎の分野を誰かがやらなければという使命感が、現在の教授の研究につながっている。

地球の生物多様性を伝えるために

教授が監修し、2010年に発刊された『新魚類解剖図鑑』。それは研究の助けとなる有用な一冊だが、教授は別の意味でも重要性を説く。「文字や写真で生き物の標本を残すことは、そのとき、その場所に、その生きものがいたという証拠になります。この地球に

暮らす多様な生き物の中で、地球の歴史を記録に残せるのは人間だけ。生き物の記録は人間の義務の一つではないでしょうか」。こうした教授の考えのもと、水産実験所では貴重な標本約3万6千点を保存。その規模は国内の大学でも5本の指に入り、海外の博物館や研究機関と標本の貸し借りも活発に行われている。「先日までシーボルトが作った標本も借りていたんです」と教授は軽く言うが、貸し借りの多くが信用に基づくもの。教授の長年にわたる国際的な交流が、世界の貴重な標本を間近に見られる環境を作っている。

ライフワークとして分類を続ける

分類学の醍醐味をたずねると、「200年間わからなかったことが、わかったときの達成感。これは科学者冥利に尽きる」と語る教授。「例えばアジは世界中で食べられていますが、分類学的にはまだ完成していません。ということも実は最近、アジの未記載種を見つけたんですよ」。分類学の研究は新種の発見が目的ではない。

魚を観察し分類し、地道に整理し続けることだ。ただ、その長い道のりの中で、これまでに教授は12の新種を自分の目で見つけ、このほか仲間とともに10種に新たな学名をつけた。そこにはKimuraの名も永遠に刻まれるのだ。教育や研究活動で釣りに行く時間がないと嘆く教授の最近の趣味はガーデニング。実験所の食堂には教授が育てたパパイヤやレモングラスの鉢が並び、ときにはそれを使って料理もするという。魚料理は何でも好きなのかと思いきや、「生臭いのは苦手」という意外な一面も。その一方で、研究対象にしたい好きな魚はどんどんと増えていく。「今はトウゴロウイワシに夢中なんです。次は海産ナマズをやりたいと思って。定年後も分類を続けて、いつか目標の科を終わらせたいですね」。英虞湾を見つめる瞳の奥には、少年のころのままの好奇心が輝いている。

木村清志 きむらせいし
大学院生物資源学研究科 附属教育研究施設
附帯施設水産実験所 水産実験所長・教授
専門分野は、魚類学、動物分類学、動物生態学

臨海実習
学生は教授の指導のもと、磯の生き物の調査や魚の解剖を行う。フィールドワーク
海外での野外調査にも多数参加。写真はフィリピンでの調査の様子。標本室
約3万6千点を保存。スミソニアン博物館などからの貴重な標本も。ガーデニング
実験所食堂には教授のガーデンコーナー。果物の種から育てた樹も多い。『新魚類解剖図鑑』
旧版の制作にも携わり、当時描いた骨格図などが新版でも使われている。